

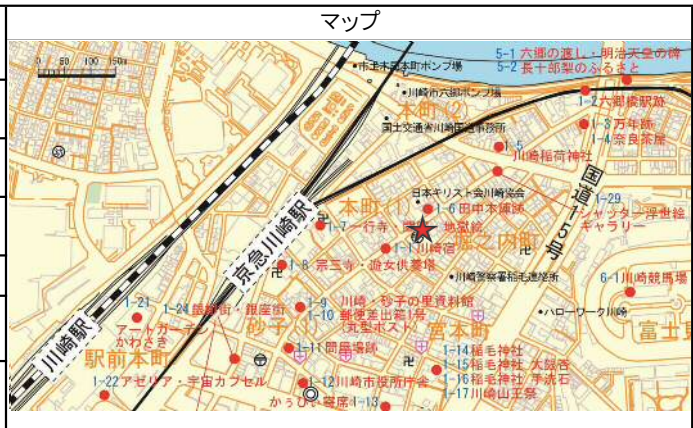
## かわさき区の宝物シート

宝物No.	たなかほんじんあと <b>田中本陣跡</b>		
1-6			
エリア	中央地区	シーズン	通年
	川崎駅前北	日時	
目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> 食べる <input type="checkbox"/> その他		
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> イベント・祭り <input type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input type="checkbox"/> 港めぐり <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの <input checked="" type="checkbox"/> 人物		



川崎宿模型（川崎市市民ミュージアム蔵）  
写真提供：NPO法人かわさき歴史ガイド協会

所在地	川崎区本町1-4-6付近
問い合わせ	NPO法人かわさき歴史ガイド協会 東海道かわさき宿交流館
TEL	044-221-9117（かわさき歴史ガイド協会） 044-280-7321（東海道かわさき宿交流館）
FAX	044-221-9117（かわさき歴史ガイド協会） 044-280-7314（東海道かわさき宿交流館）
E-mail	
URL	
交通	京急川崎駅より徒歩4分



### 基礎情報

- 「本陣」とは、主に大名や公家、旗本、高僧などを対象とした江戸時代の宿泊施設のこと。田中本陣は寛永6年(1629)に川崎宿で初めて設けられた本陣で、門構えや玄関があり延べ231坪(762㎡)の堂々たる建物であった。川崎宿に三軒あった本陣のうち、江戸側にあったことから「下本陣」と呼ばれた。
- 元和9年(1623)の川崎宿の設立当初は旅籠も本陣も存在していなかった。寛永5年(1628)、相州玉縄(鎌倉市)の大名松平正綱が江戸へ向かう途中、悪天候のため川崎宿に泊まろうとしたところ、宿泊施設が整っていないためやむなく妙遠寺に泊まったという。正綱が川崎宿の不備を幕府に進言した結果、幕府より100両の助成金が交付され、翌年旅籠12軒と田中家による仮本陣(参勤交代制度が整う寛永11年に正式に本陣となる)が開設された。
- 江戸時代中期の宝永4年(1707)、45歳で田中本陣を継いだ田中休愚は、六郷川の渡船権を川崎宿で譲り受けて、財政難にあえぐ宿場を再興させた。今日の川崎の発展の礎を築いた最大の功労者のひとりである。

### 由来・エピソード

- 本陣には、一般の民家には許されなかった門と玄関があった。江戸時代は身分によって泊まる宿が決められており、一般の旅人は本陣に泊まることは認められなかった。参勤交代が始まったことで、多くの大名行列が街道を通り、本陣は身分の高い人が宿泊・休憩する施設として栄えた。
- 八代將軍吉宗の江戸入城の途中、田中本陣に三日三晩滞在了際に、1,300頭もの馬と18,000人もの人足が集められたといわれている。川崎宿は大混乱したものの、「白米一升を炊いて持参した者には三升の値で買い上げる」とのお触れが出され、事態は収拾された。なお三角形に結んだにぎり飯を三個並べ「葵の御紋」に見立てたというが、これがその後全国に広がったという逸話が伝えられている。三角おむすびの元祖は川崎宿であり、妙案ともいえる触書と三角おむすびの考案者は他でもない田中休愚であった。
- 川崎宿の歴史に大きな位置を占めてきた田中本陣であったが、長年の参勤交代による大名家の財政悪化や文久2年(1862)の参勤交代制緩和による利用度の低下、さらには大飢饉や天災等によって本陣は次第に衰退していった。アメリカの駐日総領事ハリスが、田中本陣のみすぼらしい様を見て、宿を万年屋に変更した話是有名である。明治元年(1868)、明治天皇の東幸の際、田中本陣で昼食をとって休息し、高齢者や善行者に褒美を遣わせたというエピソードを最後に、輝かしい歴史に幕がとじられた。

### 補足・その他

- 川崎宿には田中の本陣以外に、京口より「上の本陣」として佐藤本陣(惣佐衛門本陣)、「中の本陣」として惣兵衛本陣の計三軒の本陣があった。三軒では互いに渡世は成り立たなかったことから、惣兵衛本陣が、江戸後期には既に廃業していたものと考えられている。

### 関連シート

- (1-1)川崎宿
- (1-11)問屋場跡
- (1-25)佐藤本陣跡・佐藤惣之助の碑
- (32-2)田中休愚